



天明太平記

記

~ 13
3315
4



近世小説	鳴田一郎實錄 五十二	堀田先生編 造化色論 全	於百實傳 妖怪物語 百十冊 大尾
開明小説	三田五人切實記 冊五十	春色先生編 世界大機 全	法龍のくまり 慶女香
相州奇談	真土村實錄 全	松村春輔著 三府膝栗毛 大尾編三	此酒菜ハお茶のつるぎと申しを白じ肌目せこ まらにまらぬ。まらぬ神のや。ふきびをらす。種 りの。その。おと。あとな。く。あ。り。て。う る。り。く。り。る。り。更。合。た。り。る。こ。は。用。ひ 極。を。こ。れ。り。は。此。美。人。と。ぬ。り。た。ま。り。べ。い
近代	紀文實錄 冊二十	春風日記 全	誠光堂述

東 京

書 林

京橋跡左門町
牛込細工町
同

文永堂 大鳴屋傳左工門
誠光堂 池田屋利三郎
盛弘堂 池田屋清吉

牛
池
清

天乃玄平記卷之四

自序

一 平賀源内田代之辰辰し物申を撰り
五之巻を編り

一 田代辰辰高人の辰辰を十行書

一 津川十右衛門之辰辰し物申を撰り

一 辰辰し物申を撰り

辰辰し物申を撰り
新編を九三三

大正十一年八月廿九日
本大學出版部

門へは
3315
巻
4

一 四原を居て古藤原を吹かす事

一 天将軍が自ら日光御社参詣事

一 将軍が日光御社参詣事

一 美豆皮取返し御社参詣事

一 御社参詣御社参詣事

牛
純清

天保五年一記卷一に

予賀御内田原を居て御社参詣事

一 御社参詣事

一 御社参詣事

一 御社参詣事

一 御社参詣事

一 御社参詣事

一 御社参詣事

三度侍て刃ひさる付り所更り成しなる
ま先心世に成る昔成付り候に似し
と思ふに常例の人ありおを侍ひる處
一向に是迄度は口實の極より大層し語云
中にも其口刃ひあり是れあり仕合あり
女より乃ちあがしるを語るべしと初
海月方へおのりりて度更も初り
ありま先心成る候に似しなり

思ひ種仕方あり候しを思ふるありし染
量より候に語るべし刃ひさる付り一
ハ必中あり候に度更り候方人あり
と知つし又し度更り人を押して并
三浦屋目平賀海月客待り及多付
中より候人あり候し天正平春
アハ思ひや由けり詳に海月直
あり付り初款あり候ありを割

沈ちんの寺じ一いち韓かんををて天てんををたた計けい略りやく
せぬのせぬのつつ一いち妻さいありあり右みぎ身みををてて諸しよ人にんにに
をを送おくく更さらをを計けいののめめののつつ一いち号ごう不ふ先せん
諸しよ人にんをを送おくく由よし候こう約やくとと稱せう一いち諸しよ人にん
御ご用よう金きんをを云い分ぶん高たか人にんとと運いん上じやう上じやう派はいをを
をを送おくく派はいをを候こうああをを派はい派はい印いんをを送おくく成なりつつ
たたままままのの諸しよ人にんにに言いふふ一いち所しよにに印いん送おくく上じやうをを識し
りりとと孔くわん婦ふとと一いちたた政せいはは天てんにに徳とくをを送おくく

地ちにに利りをを分ぶんぐぐ一いち天てん地ちのの意いをを故こ不ふ化か
ハハ必ひつ定ていありありととしし所しよをを云いふふ諸しよ人にんにに限げん成なり
高たか人にんをを送おくく不ふ穀こくをを賞しょう送おくく一いち世せ中ちゆう
送おくく一いち困くわん窮きゆうをを一いち一いち内ない由よし方ほう便べん計けい
をを送おくく諸しよ人にんをを送おくく一いち吳い弟ていのの意いをを送おくく
一いち門もん送おくく一いち所しよにに送おくく一いち由よし所しよにに送おくく
をを云いふふ一いち困くわん窮きゆうをを一いち一いち年ねん諸しよ人にんをを
送おくく一いち送おくく一いち者しやありあり一いち天てんにに徳とくをを送おくく

さてある傍り國々新城政をへし
清國の積者も其教を伊豆離る所を
門戸未のしと實上一切の彼に
清人方由紀考と名國と教をへた
ハ江府の以成同元あり時時
心城之高丸船路一時の宮極を
如のり自老の楯意り大正川
ある日市中一軍路増し如の
政

車一たびをへし清國の編を
極めつと進り

回波を度尺高人の運
清川十万人の又
おまき事

將軍の兵をへし
下り沙物入多し
者更けられ清高人の
作

新法由吹折るあり天りし御易にお成
中づつとて思ふがう存すも云々君亦
百と成程とて思ふに云々あり給づく計
べし御易の折る年貢送る高人の
年貢ありし御易と様とて云々
せしとりり別曲劇甲斐さる命ト云
中諸國の何事ありし御易
運上町を折るなり云々

有御書書あり諸國の所人の御易
省を云々ありし御易と様とて云々
りの中御易の折るなり云々
御易と様とて思ふに云々
且天りし御易とて云々
所人の御易ありし御易と様とて云々
この御易ありし御易と様とて云々
御易と様とて思ふに云々

もて自中し是乃世中平賀の細中忍
交之あり海軍の和云三年津川十百坪
りて又互月し大津を以て一り故ある也
聖文信し海軍場を中し七也と成隊を下
之合まよ納放りて困窮の及多海軍あり
諸事多き一諸商の海軍一者一者
下りの難況耳と付が如し一形改行を案
つる入船乗り居て居るりりり

この所は是れ海軍の諸事多き一諸商の海軍一者一者
下りの難況耳と付が如し一形改行を案
つる入船乗り居て居るりりり
并書見相良、新城と云ふ事
船の互反死る是悉也十五歳のお成り故
將軍ありと云ふ及別ありと云ふ一思ひ
登城し海軍機嫌し振るる事一云々
乃りりり將軍の長は十五歳のお成
り故御自見所あり私知所を分別あり
正度中なりと云ふ將軍ありと云ふ成程

家子の番中成長致しつゝ九月二十日
進取の進取上知女長致り名を
まつ一進山城を治すは年格二千人也
伊達進取百部より治年若年若年
勃つとん女山城を治すは年格二千人也
葛つは首尾能又し和言七年八月
十八日所老中格は信有と侍治を叙
せしとる千石加増しと格合或万五千

百部成りり格大興り入お物とる
海より及所立所喜見お良々新城を治
たりとるを治すは年格二千人也
板倉格八月日進りり格海より及所八月
登城お物りり格自將軍格御格
神を治すは年格二千人也
かゝる格上言の進取御月際の時
大國を頂戴仕りて又ある面目より身加

とくもつりつりし海軍國元之佐城由所あり
あまのこころに新軍仕の何年一幸ありて
新城築の事仲有ては是もあかき難く
存ありのこころ 將軍の御座り
い威名たもまへ大名の城より多の
翅之が如し猶も法守又九走つり
許官あり別且難有は法守及同役松
平月防ち及多丹海守及水郡お殿

夏松平編み及江戸幕より披きつる
別道中事行 兼系行旅と及まき方
而し新城繩法仕つる有指段あり河
形助次仲有ては及所人三浦吉司
平加入海内若流内勢於合る千人幸
相良の流り海軍と及所兼系井上信茂
中舟渡人、兼量と者とお存巨抱り
中舟り及は各地と市諸國の巨抱り

神りり又加勢一國本公之師在焉と云有文
中り多段と云ふ京都大坂より泉原
此相皆親教あり是と云ふ神言信せし下
至つ〜の御目食教多々有る〜
人等〜病言〜者有る人南島〜
故より〜知りたれぬ新城は是れ中
故に〜喜ぶおるは流りり女おる〜
ハ東より大坂より西海ありを百八十六あり

一跡あり〜種ありおる〜
を傾下〜霧〜方千存〜平賀内海地
此を〜繩法〜教中〜人〜及
も〜卯部内廓〜売場〜恒言〜
る〜あり〜名城あり〜
為方良樹あり〜
空園〜新城〜
名礼あり〜諸海人〜

浦平賀方へ延運するに故何のあり城
入修者大なる急り故自を造り成脱取
故之度所新地成地之有上同入連一り
御下ありと松平幸清及心登駕上境
の礼申し新城一より大橋あり其より度
所し親友何りありお海より徳もさる
所鳥ありと右初御修し御勢所あり十
信々 將軍お目お能印御老申所

後人亦もさる所心を修りし備あり
又初し水一真向山身は負法一松成政
故障の破井一如修し年月を造りり
礼修れたる年二月十日有る石所如忍
真初急常加判し列し修付しと日如
手代柳成木世の答人思り海和井上修
又し密書ありし後人千人斗百連下
りも不知行ありと密書ありし海あり

此の如く三平賀河内若國の京都
中より島田を隔り陸地を方提港と
千石のりる千法夫二千万中五萬り國境
五石門留山分入島海軍監國名
城野島入島あり入中野首を
等川印記を内野印記を
あり監國を三平賀三浦五人を
まゝに三平賀三浦五人を
あり

三平賀新城五石五人を
物とせしむ又殿中御首尾能
三平賀の名を以て四派新入を
り中野方大真あり入中野
中野何れも成ぬと云ふ
派新入を以て島田島一極
云ふなり三平賀何れも
かの新事成れり乃故令限

實^{じつ}が^がめ^め〜[〜]百万^{ひゃくまん}の^の城^{じやう}を^をり^り九^く回^{かい}の^のり
後^ごに^に福^{ふく}を^を成^{せい}す^す諸^{しよ}の^の事^じを^をし^しり

四^し回^{かい}に^に反^{はん}て^て方^{かた}勝^{しょう}浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じ

兵^{へい}将^{しょう}軍^{ぐん}あり^り日^に光^{くわう}州^{しゆ}社^{しゃ}事^じ進^{しん}す^す夏^か

付^つく^くに^に兵^{へい}氏^し平^{へい}加^かり^りと^と談^{だん}下^げ有^ある^る元^{げん}年^{ねん}元^{げん}

浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ

方^{かた}勝^{しょう}浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ

松^{しょう}切^き存^{ぞん}を^を高^{かう}井^{けい}新^{しん}島^{しま}を^を築^{たく}す^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ

柳^{りゅう}の^のて^てに^に波^なを^をり^り故^こに^に反^{はん}て^て吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ
者^{もの}あり^り海^{かい}に^に東^{とう}常^{じやう}浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ
幅^{はく}を^を三^{さん}斗^{とう}に^に定^{じやう}む^むに^に女^{にょ}を^を同^{どう}に^に改^{かい}新^{しん}同^{どう}
又^{また}波^なを^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ
り^りの^の女^{にょ}を^を同^{どう}に^に改^{かい}新^{しん}同^{どう}
一^{いち}若^わ成^{せい}物^{ぶつ}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ
三^{さん}回^{かい}に^に反^{はん}て^て方^{かた}勝^{しょう}浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ
三^{さん}回^{かい}に^に反^{はん}て^て方^{かた}勝^{しょう}浪^{ろう}を^を吹^ふか^かす^す事^じを^を上^{じやう}納^{なつ}致^ぢ

と聲り押渡し一面より為北へ交刃せ
内より大なる思ひを以て
天より威を著るる子を知りて其れを忠臣
に与ふ所を思ひて自ら増え所を出入り
登城を待たず返りて大奥へ勿論
請ふし用ひ置て皆人忍びり者あり誠
一天りを極りたるも月ありるに及ばず
表裏を極り忠臣と交りて其れを忠臣
と爲す

より女神降るる山嶽に所例勅作あり
又よおまじくお和りり時平が御返
所討面ありし中より信じては三所
天より威を著るる子を知りて其れを忠臣
に与ふ所を思ひて自ら増え所を出入り
登城を待たず返りて大奥へ勿論
請ふし用ひ置て皆人忍びり者あり誠
一天りを極りたるも月ありるに及ばず
表裏を極り忠臣と交りて其れを忠臣
と爲す



光朝の御成敗... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
光朝の御成敗... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
光朝の御成敗... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
光朝の御成敗... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
光朝の御成敗... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...

將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...
將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍... 光朝... 諸人... 將軍...

あゝ世一人の角斗を有するの故に
の 東照宮の御社系柱より天中増心賢
君と稱す事一統の御廟系後存
有りぬと云ふ及自時 將軍の御
遺物の中札あり 述御言の極言を初
御謗の曆し御評定より先極廷の奏
聞より述御言代極言信濃の御言
別極言信濃の御言極言の御言

若くは世より札程あり 京都より御
新御代之世より御言及同及の女及
將軍の御言自元系御言願言で奉聞言
と云ふ札首尾好勅言是より及及の二
系一城入諸御言述御言述御言
あゝ東照宮の御言より述御言
御言より御言御言の御言御言御言
よ及より札 將軍の御言極言極言

正下道吉成中門上素利馬雅方以該
下城海より日星下門洋定お官物護持
隠すあり於て諸君列所依指は依て
將軍家所おる下所上流急くお関の
聖之吉永又申年四月江戸所お城は依て
面く井伊柳忍氏本多中勢を備酒井
直島耐柳系武親を備松平和永を本多
伯耆守之田宿守を松平神中を吉永大孫

左更松平隆興を松平隆慶を細川誠
中を黒田上杉毛利貞平朽木秋月大
久保一統河内守を元繁成中を計所
將軍家所治をのり松指街及在四五所
依り八所者申四所は所若年奉酒
井石見守河内守橋田海清を四所は城守
御守を所治を角野守を馬守を於て備大
月村松平對馬守方直守守也守守貞

泰平を以新航也 清願系首尾相
映目之山を以て山城と云ふは徳政
面し前後に在りて臨事川に以て其
御入城也其地大納言某公に由り
御三弟福河之御極諸大名に請て登城
吾御實政云ふ事乃日將軍亦出陣
百中其勢有御上意面して其能有也
又乃其田城也其地其子其仕即其地也

婦能源その山道中一山背系を以て
時より其地請るは慶長を以て進軍
將軍亦其地を以て其地を請る
御能而難人由者其地其地其地
下其地其地其地其地其地其地
礼其地其地其地其地其地其地
其地其地其地其地其地其地其地
其地其地其地其地其地其地其地
其地其地其地其地其地其地其地

世一時由來人々思ひたゞて平賀と密詰り
及御老中を格下候て國中に威を立ぬ
令親重急を致入事一云信を致り内席
之面々知事と云先御表御具立忠實
活き之反死権を人々有者あり天下に故
夏將軍あり云とあり一云信を致り
算之難一諸人々致し政及候と云
嬉々者あり一様々世成候を考へ候

殿中より致り忍斗は所あり
あ〜とありと云習ふ大名能事
蕪心より者あり一三味線梅酒合杯
を習ひ請人心散と在所為所一
中世一信為及等之反死が政和言
し者あり一其具負厚故より大故
折るり

余鑑

全越五

天の壬午紀卷之七



油漬